臥龍が丘は緑なり

村松高校東京同窓会会報

平成26年(2014)新春号

新歌舞伎座　６０年間使用された４代目歌舞伎座は、２０１０年に建て替え工事を始め、３年を経て新しくなった歌舞伎座が２０１３年４月２日、こけら落とし興行の初日を迎えた。５代目新歌舞伎座は、和風の劇場部分と２９階建ての歌舞伎座タワーから成る複合ビルである。劇場部分の外観は先代を模し、金属製の装飾もあらかた再利用し、屋根には愛知県特産の「三州瓦」を約１０万枚使用した。正面玄関の鬼瓦の重量は約５００キロの巨大さである。座席数を以前より５９席少ない１８０８席に抑え、前後左右を広げ座り心地が良くなった。　撮影　木村寿一氏

新潟県立村松高等学校東京同窓会　No. 55

「夢とロマン・ベーゼンドルファーのピアノ復活」

―同窓生きずな＆松高復活―

東京同窓会会長　金子鶴男（高5）

謹んで年頭のご祝詞を申し上げます。皆様のご発展と新春をお慶び申し上げますとともに、本年もよろしくお願い申し上げます。

今年の干支は解放された生長の歳とされています。

東京同窓会は毎年キャッチフレーズを掲げています。平成２３年「蘇れ！松高　興せ１００年の風」平成２４年「松高元年！地域に理解と信頼され魅力ある高校づくり」平成２５年「松高往け！目指せ、地域のスペシャリスト」母校の発展には地域の理解が大であります。

さて、歴史と伝統そして光輝ある母校松高が平成２３年に「創立１００周年記念誌」を発刊されました。その記念誌に６箇所にわたり「ベーゼンドルファー」の記事が掲載されています。これは重要校史事案として経緯を認め編集されたと思います。その中で我々に決して忘れられない事案を特に印象に残る文章を上げました。

タイトル１【名器ベーゼンドルファーが高女に・大火をくぐり抜けた伝説のピアノ】～音楽教師の熱意に村松町は高級舶来品に予算措置された度量と教育に懸ける当時の熱意が感じられる～・―火中必死にピアノを運び出した熱意に感嘆します―

タイトル２【ベーゼンドルファーというピアノ】～こんなすばらしいピアノが実は村松高女に購入されている。考えてみれば何と贅沢な、そして幸せだったであろう～

旧職員、旧高女の方々が深い思いを込めて同窓生へ伝えたいと粛々恋々（しゅくしゅくれんれん）と書かれていました。２５年東京同窓会総会、ご講演なさいました大橋秀雄東大名誉教授は「松高校門をくぐった卒業生は絆で結ばれている」と強調されました。報道機関も特集紙面で取り上げています。平成２３年１２月五泉新聞、≪世界の名器現役で８０年・プロピアニスト・みどりオルトナー（ウイーン在住）松高訪ね音色、深く軽やか≫「鍵盤の表面が一部はがれていたり、ペダルの動きがいまひとつ、歳月を感じました。」“平成２５年７月新潟日報≪よみがえれ！ピアノの名器≫”母校の宝物を何とかしたいと定期大会で復活基金創設を決め、東京同窓会は「ピアノ復活」に立ち上がりました。卒業生２万人、これを契機に同窓会、母校へ目を向けていただき、「ピアノ復活」と「松高復活」はリンクすると思います。皆様のご理解とご支援を賜り「夢とロマンのベーゼンドルファー」を復活させたいと存じます。

平成２５年度　東京同窓会事業計画

【定型事業】

６月　１日　平成２５年度定期大会
随　　時　会員名簿・幹事名簿の加除修正発行及び保管
随　　時　会則の改正
随　　時　他校同窓会との交流及び幹事研修会の企画
８月１８日　同窓会本部総会への参加
Ｈ２６年３月１日　会報誌５５号　新春号の発行
随　　時　所有物品の整備及び管理保管
随　　時　財務全般、予算・決算書の策定

【特定事業】

随　　時　甦れ　松高！母校の発展を考える会運動の立ち上げ
随　　時　ベーゼンドルファーピアノ復元基金の会
随　　時　広報宣伝の研究及び会費増収手法の研究

平成２５年度　会計収支予算

（平成２５年４月１日より平成２６年３月３１日まで）　単位：円

収入		支出	
会費	1,580,000	第56回大会費用	850,000
（年会費　780,000）		会議室借用費（幹事会、各委員会の開催）	90,000
（大会費　800,000）		会報関連費（年１回の発行）	235,000
寄付金	10,000	通信費（宅配便、ハガキ、切手代等）	45,000
雑収入	1,000	渉外費（本部同窓会出席、県人会賛助会費等）	130,000
		諸雑費・予備費	140,000
収入合計	1,591,000	支出合計	1,490,000
収支差金	101,000		
平成24年度からの繰越金（見込み）	150,000		
平成26年度への繰越金（見込み）	251,000		

村松高校 東京同窓会・第５６回大会報告

石黒　勝夫（高１４）

村松高校東京同窓会の第５６回定期大会は、６月１日（土）、千代田区飯田橋のホテルグランドパレスにおいて総勢９８名が集まって開催された。来賓として同窓会本部から荒木快英会長、母校から早川勝志教頭、本部事務局から３名を迎え、石井清和・松澤綾子両幹事の司会で進行した。

第一部総会は、吉井清大会実行副委員長の開会の言葉で幕を開け、金子鶴男会長のあいさつの後、荒木同窓会長、早川教頭からそれぞれごあいさつをいただいた。この後、総務・財務・広報の各委員長からの１年間の活動報告を承認し、最後に３名（鈴木多喜男、篠川恒夫、渡辺八郎の各氏）の顧問就任、会則改正を承認して終了。

第二部の講演会は、大橋秀雄先輩（高２、東京大学名誉教授・元工学院大学学長などを歴任）の「校門がとりもつ絆」と題した国の登録有形文化財となっている母校の校門設立ゆかりの人物（荒川新一郎）と設立にまつわるロマンあふれるお話しに、出席者は静かに傾聴し、母校に強い誇りを持つことができた。

第三部の懇親会は、鈴木顧問の乾杯の音頭でスタート。ふるさとの地酒も振舞われて談笑の輪が広がり、恒例のお楽しみ抽選会も加わり、賑やかに進んだ。

最後は、篠川顧問の手締めで閉会した。同窓会の歴史に新たな１ページが加わった有意義な１日となり、出席者は晴れやかな顔で再会を約しつつ会場を後にした。

東京同窓会・第５６回定期大会収支報告書

平成２５年６月１日（土）：ホテル　グランドパレス

収入の部（単位：円）		支出の部（単位：円）	
①会費　93名（×8,000）	744,000	①懇親会費	674,000
②会員寄付金	30,000	②講師謝礼等	55,250
③同窓会本部（活動助成金）	50,000	③同窓会本部対応費	31,340
		④通信費（案内状、ハガキ、切手）	44,680
		⑤諸雑費（資料代、機器使用料等）	114,562
収入合計	824,000	支出合計	919,832
（一般会計から補てん）	95,832		
総　　計	919,832	総　　計	919,832

司会の石井、松澤幹事

会場風景

乾杯！鈴木顧問

講演中の大橋秀雄先生

大橋先生へ花束贈呈

中締め・篠川顧問

（講演内容は、同窓会ホームページでご覧いただけます。）

大会講演「演題：校門がとりもつ絆」を拝聴しての感想

『校門がとりもつ絆』講演に接して

篠川　恒夫（高２）

現在、母校松高の校門は、貴重な文化財である国の登録有形文化財として登録されている校門であるが、誰が、何時、どういう意図であの校門を作らせたのか、何処にも歴史を辿る資料もない中、大橋氏が色々手を尽くして数か月に亘り文献やそれに纏わる関係資料を調べ、その中で前身である県立工業高校の設立時、英・仏共存の煉瓦積みの校門に着手したと推測できる或る人物像から、その校門が大橋氏にとって二つの母校に繋がる校門であったと感じ取る事が出来たようです。

そして『絆』として結ばれる縁を探り当てた経緯も含めて、彼の苦労と情熱と探究心には、出席者全員に深い感銘を与えました。

嘗て、記録どころか言い伝えさえも残っていない、百有余年前に構築されたと思われる校門の歴史の扉を開けてくれた事について、彼は最後に「この説を裏付ける証拠はありません。しかし、それを否定する証拠もありません」と結んでいます。しかし、大橋氏の文献や史料に基づいた調査資料は価値ある史実として残されるべきものと云っても過言ではないと思います。彼の素晴らしい講演と貴重な記録に心から賛辞と惜しみない拍手を送ります。　（付）　大橋氏の講演は、同期の篠川氏からお願いされて実現したものです。

校門がとりもつ絆

青木　敏和（高１８）

平成１９年の暮れ、山岳部の同期生伊藤五郎君から、松高校門と旧校舎に松の木のスケッチ画と一緒に「ちょっとした朗報があります」との手紙をもらっていました。

その内容は、文化審議会から松高の校門が「登録有形文化財」として答申されたというものです。その校門はレンガ造り３本の門柱で、間口３．９m、高さ４mが２本と３．２mが１本です。この門柱対の２本がイギリス積み、左の小振りな１本がフランス積みです。イギリス積みは小口レンガだけで組む段と、長手レンガだけで組む段を交互に積み、フランス積みはどの段も小口と長手を交互に組んで積み上げているということです。

明治３５年から１０６年、大火などもあり校舎は３代目ですが、約２万数千人の卒業生を送り出した校門は、今もいぶし銀の如く光り輝いています……と。

歴史的由緒ある校門と思っていたのですが、大橋秀雄先生の講演は、母校の校門がどのような意図で英仏共存の門柱を造らせたのか、その謎に対するヒントでした。

門柱の脇を、歴史や由来を知らずに何気なく通学した卒業生の一人でしたが、誇りを胸にできた講演でした。

大橋先生のご講演に寄せて

武藤　達家（高１９）

今年もお盆を迎え、寺の境内に蝉の声だけが染み渡る中、両親の墓に暫し手を合わせる。山門を潜り抜けると、そこには昔ながらの寺町の佇まいがあった。ふと大橋先生の「校門がとりもつ絆」の講演を思い出し、足取りは松高に向かっていた。１０年以上訪れていない、しかし校門と松林は昔のまま私を迎えてくれた。早速レンガ積みを確かめ今まで以上に愛着を覚えた。私には、同様な経験が他にもある。

４０年近く勤めた非鉄製錬会社の一場所に生野事業所がある。古くは生野銀山で知られ、大正２年に日本最初で唯一錫製錬所に引き継がれ、今年で１００周年を迎える。現存する事務所、工場建屋は、明治５年に旧工場が焼き討ちに遭い、その後フランス人技師らによってレンガ造りに建て替えられたものである。原型は全てフランス積みであるが、後に修理された箇所は堅固なイギリス積みに変わっている。

レンガ積みの歴史を知り、改めて建物を眺めると、更に愛着が湧く。またそこで働いた多くの人達の絆がレンガ積みを通して築かれて来たと思うと感慨も一入である。

松高の校門は、これまで１００年余多くの卒業生を送り出し、これからも続くと思われる。校門を通して同窓の輪が更に広がることを祈念している。

「校門がとりもつ絆」を拝聴して

松澤　綾子（高２２）

大橋先生の聞き入る人達を飽きさせない、もっともっと次も聞きたくなる様な、そんな絶妙なお話しぶりについ聞き入ってしまい、時間があっという間に過ぎ、先生のお人柄の良さでしょうか、本当に感動させられました。あの時の拍手喝采は今でも心に残っております。最後の花束贈呈に、私ごときがお役目に授かり、先生に握手までしていただき、この上もない喜びで一杯でした。伝統ある松高の赤レンガ校門を３年間潜って通ったこと、また、この様なすばらしいご立派なお方が大先輩におられたことに、誇りを感じています。

私の育った家が松高の近所だったということもあって、幼い頃からよく松高のグラウンドの鉄棒で遊んだり、グラウンドの裏手にある百日紅（さるすべり）の木に登ったり、裏側の小高い赤山に登ってドングリなどで遊んだ思い出が一杯あり、松高は格好の遊び場所でした。

この度の大橋先生のご講演で尚一層、伝統ある松高の歴史に興味を掻かされました。「校門がとりもつ絆」という演題もすばらしい表現で心に響きます。

本当に有難うございました。

東京同窓会　第５６回大会　出席者名簿

於　ホテル・グランドパレス　３Ｆ「白　樺」

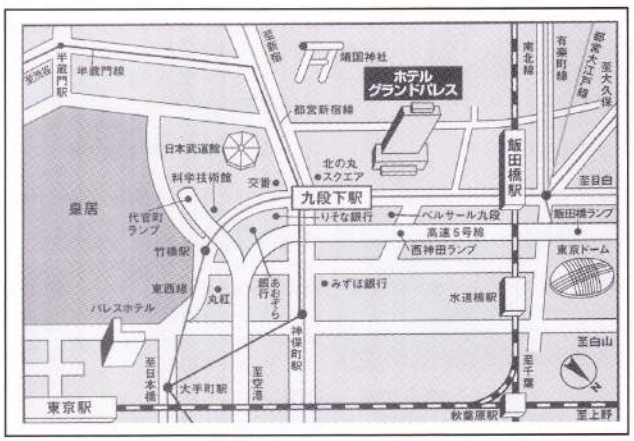
来賓・他（6名）	高校（９１名）				
村松高校同窓会	０２　篠川　恒夫	０７　加藤　喜七	１３　金子　健二	１９　武藤　達家
会長	０２　杵淵　政海	０７　宮川　裕皓	１３　波多野紀子	１９　五十嵐勝栄
荒木　快英　様（高４）	０２　堀川　俊郎		１３　武藤　正昭	１９　石黒　久七
	０２　村川　五郎	０８　岡部　ユキ		１９　塚野ミイ子
村松高校	０２　星野　孝子	０８　片柳　ムツ	１４　石黒　勝夫	１９　野平　茂子
教頭	０２　川合　敏男	０８　木村　孝子	１４　熊倉　道雄	
早川　勝志　様	０２　真島　節朗	０８　小出　博三	１４　猪口　成吾	２０　宮崎　信次
	０２　下野　孝一	０８　鈴木　輝雄	１４　伊藤　昌夫	２０　安達　繁子
村松高校事務局	０２　山田羊歯子	０８　塚田　勝	１４　加藤　延雄	２０　石井　清和
熊倉　洋子　様（高20）	０２　白井　雄三	０８　村川　忠司	１４　山田　俊治	２０　重黒木賢二
酒井加代子　様（高20）	０２　丸山　貞次	０８　山﨑　輝雄	１４　落合三枝子	２０　弦巻　功
熊倉富美子　様（高20）		０８　山西　愈佐子	１４　大島　桂子	
	０３　小池　生夫	０８　吉井　清	１４　安中　邦夫	２２　笠原　和夫
講演会講師	０３　渡辺　八郎		１４　徳橋　哲治	２２　斉藤　公明
大橋　秀雄　先生		０９　石黒　四郎	１４　波多　幸英	２２　平山　誠一
	０４　鈴木　健司		１４　羽下　紘樹	２２　松澤　綾子
	０４　鈴木多喜男	１０　大橋　貞夫	１４　樋口　紘一	２２　濱田　守
	０４　二宮　文三	１０　新保　優	１４　斎藤　正克	２２　大橋　利光
	０４　辻川　登	１０　宮沢　正由		
	０４　梶屋　庄佑		１５　高岡　光夫	２５　林　信子
		１１　佐藤　赳		
	０５　金子　鶴男		１６　郡司　正大	
	０５　雲村　俊慥	１２　今井　英雄		
	０５　高濱つる子	１２　近藤　洋輝	１８　青木　敏和	
	０５　山崎　豊吉	１２　高岡五百子	１８　安中　幸雄	
		１２　徳永　道子	１８　笠原　静夫	
		１２　佐々木秀三	１８　斉藤　正義	
旧　中（1名）	０６　畔田　昭義	１２　茂野　本史	１８　高岡　英治	
２７　佐伯　益一		１２　貝沼　庄作	１８　三室　茂和	出席者計　９８名
		１２　神原　豊	１８　岩野ハナエ	

平成２６年度　松高東京同窓会開催のお知らせ

◆日時　　２６年６月７日（土）
　　午前１１時半開会

◆場所　　ホテル　グランドパレス
　　〒102－0072
　　千代田区飯田橋１－１－１
　　Tel：03－3264－1111

交通　●地下鉄「九段下駅」
　　＊東西線７番出口から徒歩１分
　　＊半蔵門線・都営新宿線
　　3a 出口から徒歩３分
　　●JR・地下鉄「飯田橋駅」から
　　徒歩７分



一芸を極めれば、他芸もわかる

村松高等学校　校長　鈴木　重行

新年あけましておめでとうございます。同窓会の皆様におかれましては、お元気に新しい年をお迎えのことと存じます。日ごろより村松高校の教育活動に多大なご理解とご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。創立１００周年記念式典を厳粛なる雰囲気の中で、立派にやり遂げ、新世紀松高として、新たな試みと誇りを持って歩み始めたばかりであります。諸先輩方の更なるご協力を心よりお願い申し上げます。

今年度の村松高校の様子を報告させて頂きます。

就職事情につきましては、いまだに厳しいのではと懸念されておりましたが、本校独自の取り組みといたしまして、同窓会のご協力をいただき、「就活バス」を５月２５日に東京方面へ運行いたしました。２年生全員に、７月２２日からインターンシップを行って仕事への理解を深めたり、６月１９日には３年生むけに、本校体育館で五泉市内合同企業説明会を開催するなど、できうる限りの努力を行ってきたつもりであります。

進学希望者向けに、放課後補習を計画し、大学入試に対応できる学力の向上に努めているところであります。昨年度の大学受験では、一般試験で國學院大學への合格者を出しました。同窓会より設置していただきました、エアコンのおかげで、夏休み日数も従来より数日間短縮でき学力向上に努めております。

保護者の皆様方にも、大学進学希望者を一人でも増やしていただければと思い、さまざまな場面を捉えて情宣活動に頑張っているところです。学校では、現２年生、３年生にて、進学向けの放課後補習が８月２１日から実施されました。今年の３年生は１月のセンター試験を８人受験予定であり（昨年度は５人）、特別編成授業が予定されております。

村松地区の愛宕中学校、山王中学校へ本校の教諭が出向きまして、過去の高校入試問題を解説するという試みを実施いたしております、中学校からは好評を得ており、今年度は、範囲を本校生徒の出身中学校へと拡大して実施しております。

昨年度は中途退学者の数をついに一桁へ減らすことができました。中には、中学校時代に不登校で、ほとんど学校に通学できなかった子が、村松高校で１年間皆勤であった生徒もおります。毎朝、校長、教頭、生徒指導、先生方で朝の立哨指導を行っていますが、昨年に比較して、遅刻者の数が圧倒的に少なく、授業中も静かで、平穏な学校生活になっております。今後は、学習指導へエネルギーをシフトしていきたいと考えております。

職員は、昨年の春に大きな異動がございました。新潟高校へ３人（山本、山田、品澤）、新津高校へ（小林、昨年度文部科学大臣表彰）や中等教育学校（竹石が高志中等へ、五十嵐が村上中等へ）等、優秀な人材が引っこ抜かれていきましたが、代わりに、新進気鋭の先生方をお迎えし、日々頑張っているところであります。存続が危ぶまれた、野球部には新入生が大量に入部し、１年生中心のチームながら、春は初戦を撃破、対村上桜丘戦では、惜しくも敗れましたが、１年生中心で、あれだけ健闘できれば、来年、再来年が大変楽しみです。と私が言うと、石塚監督は（今年度高野連から表彰を受けましたが）、集中力がもっとあれば、あのとき１点は取れたと、日頃の生活態度が集中力を育てるのだと、更なる引き締めにかかっておりました。

サッカー部も大変頑張っています。宮崎教諭（U18の新潟県代表監督でもあります）を監督に迎え、生徒は選手としても、人間としても少しずつではなく、激変して成長しております。これからのサッカー部の活躍が楽しみであります。

入学志願者数は、私が赴任しましたＨ２３年は、新入生が９１人でありましたが、Ｈ２４年は１０１人、そして昨年の春は１１６人と増えてきております。これも皆様方同窓会の方々の温かい援助と、松高の先生方の、生徒に寄り添った、本当にきめ細かく、まるでお母さんのような、いや親以上の面倒見と指導のお陰であると思っております。その甲斐あってか、最近地域の方々の、松高の評判も良くなってまいりました。挨拶が嬉しかったとか、ふれあいバスの中で親切にされたとか、ちょっとしたことかもしれませんが、嬉しいお便りも何通か頂いております。松高にとっては何よりの宝だと思います。

今年の私の目指すところは、法隆寺の鬼といわれた、宮大工の西岡常一の言葉、『若者に告ぐ。親方に授けられるべからず。一意専心、親方を乗り越す工風を切磋琢磨すべし。これ匠道文化の心髄なり。心して悟るべし。』『一芸を極めれば、他芸もわかる』（一芸を極めれば、他芸の真髄から何かを学び取り、自分をさらに高めることができる。だから自分の道を極めるべく、精進しなさい。）の意味を生徒達に理解押させることです。

学問は、授けられるものではなく、自分の力で、先生方から盗み取るものであることをわからせたい。

こんなとりとめのない挨拶になってしまいましたが、皆様方の母校である松高をますます発展させ、輝かしい歴史を刻んでいけるように、今後ともなお一層のご厚情を賜りますようお願い申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

母校・村松高校の主な動き

石黒　勝夫（高１４）

平成２５年度（７月～３月）

７月

○　第９５回全国高校野球選手権新潟大会で、村松高校は２回戦で優勝候補の一角村上桜ヶ丘に惜敗

１回戦　村松高校９―２敬和学園（７回コールド）

２回戦　村松高校０―５村上桜ヶ丘

１年生中心のチームながら最後まで大健闘した。

来年、再来年の活躍が期待されます。

８月

○　新潟高校の進学補習（２年生）に参加

昨年に続き、８月２０日、新潟県下一の進学校である新潟高校の進学補習に、２年生２名が参加した。

○　３年進学補習

夏休みの２４日から、進学向け補習を実施。

○　始業式・服装検査（３０日（金））

９月

○　卒業生講話等（１８日（水））

２年生を対象に、働く意義や職業観を早めに身につけてもらうために、今春、社会人として巣立った卒業生を招き、就職戦線を乗り切った体験談や心構えを語ってもらう授業を、３年生対象に、薬物乱用防止教室を行った。

○　臥龍祭（２８日（土））

テーマ：～心を一つに　繋ごう絆～

１２月

○　２学年修学旅行（韓国）（１日（日）～３日（火））

１月

○　始業式・頭髪服装検査（７日（火））

３月

○　第６６回卒業式（４日（火））

同窓会本部の平成２５年度 総会（８月１８日）に出席して

石黒　勝夫（高１４）

母校村松高校の本部同窓会総会が五泉市村松城町の割烹新龍で開催され、金子鶴男会長と平山誠一幹事と共に出席しました。

今回の本部の総会では、東京同窓会が６月１日の大会から独自に取り組んでいる「ベーゼンドルファーのピアノ復元基金」を本部からもご支援をいただくための決議をしていただくことが目的でした。

本部の議案には、定例的な事業報告・決算報告、事業計画・予算案のほかに、今回は中高一貫校プロジェクトチームの報告もあり、加えてベーゼンドルファーのピアノ復元基金の議案も提案されることから、開会時間を３０分繰り上げ、午後４時３０分からの開会となりました。

荒木快英本部同窓会会長と金子鶴男東京同窓会会長のあいさつは、それぞれ提案されている議案があるために、簡潔なあいさつでした。

ベーゼンドルファーのピアノの復元基金の議案については、提案説明は東京同窓会に任されましたので、はじめに金子会長から東京同窓会が取り組むこととなった経緯を説明。次に佐藤峰雄先生（新潟大学名誉教授）からピアノ復元の必要性を、さらに石黒勝夫広報委員長から東京同窓会が取り組んできた内容を、最後は平山幹事からはピアノの活用策を、それぞれ説明し、本部から全国の卒業生に復元基金へのご寄付お願いの文書発出をはじめとしたご支援をお願いしました。それを受け、本部から出席者にお諮りしたところ、全員の賛同をいただき、本部も取り組むこととなり、その実施時期等の詳細は会長に一任されました。

正直申して、本部に先行して東京同窓会が取り組んだために、本部の出席者からは多少の質問があるものと思っていましたが、一つもなくすんなりと決議されホッとするとともに、これから大丈夫だろうかという心配も胸を過り、複雑な気持ちでした。

しかし、総会を終えて懇親会に入り、本部の皆さん方にお酌とお話しをしながら回りましたら、「東京同窓会でピアノの修復に取り組んでいただき感謝します」ということを、何人かの方から言われて、それまでの不安は一掃されました。

取り組んで良かったと思う総会でした。

あいさつする金子会長

シリーズ　第２回

先輩！　こんにちは／佐藤峰雄さん（高２回生）

敗戦、そしてピアノへ

滝沢　義則（高２２）

今日は１１月３日文化の日です。新潟日報の１０ページ目を開けると『秋の叙勲受章者』が発表されていました。“瑞宝中綬章　佐藤峰雄（８１）新潟大学名誉教授”のお名前がありました。佐藤峰雄先輩です。松高には購入から８０余年経過したベーゼンドルファーというピアノの名器があります。これを復活させて松高の新たな歴史を刻んでもらおうと東京同窓会は立ち上がります。そして、本部同窓会も加わり運動は更に盛り上がり遂に目標のメンテナンス費用４００万円を達成します。なんと１年もかかりませんでした。この運動に専門家として、そして６０数年前に実際にこのピアノを弾いた時の感動を忘れていない生徒として、１千口のご寄附と適切なアドバイスをして下さった方が、佐藤峰雄さんでした。

佐藤さんは村松宝町のご出身、現在は新潟市内野にお住まいです。この６月まで１００歳の叔母さまのお世話で度々ご実家や愛松園に足を運ばれていたとか。その叔母さまも特養ホームに居を移され今は一安心です。佐藤さんと音楽との関わりは小学校時代まで遡ります。音楽が大好きな旧制村松中学校生の従兄、和邦さんがいました。五泉のお宅からクラシックレコードを持って頻繁に来てくれたそうです。“ベートーベンのシンフォニー”、“ショパンの曲”や“流浪の民”など。兄弟４人と和邦さんを加え５人で蓄音器を囲んでドイツとイタリアの名曲に耳を澄ませたそうです。当時は戦争中。三国同盟を結んでいたドイツとイタリアという欧州音楽の根源と言われる曲のみ聴ける、とても幸運な時代でした。佐藤さんは蓄音器の“ねじ巻き”係をしながら音楽への興味を自然と高めていくことになります。和邦さんはピアノも弾けました。佐藤さんは和邦さんがお兄様を伴い講堂のピアノを弾きに行く時はくっ付いて行きました。講堂に入れなく窓越しにピアノの音色に耳を傾けたのです。音楽に触れるキッカケを作ってくれた和邦さんは武蔵野音大へ進学して行きました。

昭和１９年、中学生になります。先輩達は横須賀の軍需工場へ勤労動員の時代。佐藤さんにとって、授業もなく勉強しなくていいこの時代は天下泰平だったと仰います。もっぱら、今の愛宕原（新大農学部農園）辺りで毎日４、５人でトロッコを押して飛行場作りが授業の代わりでした。苦痛もなく遊び感覚です。また、飛行機の燃料として“松根油”を採る作業もあったとか。気が遠くなるようなお話です。あの和邦さんは沖縄へ向かう輸送船で戦死。お兄様方も皆召集され、戦場で散っていきました。

昭和２０年、中学２年生で終戦を迎えます。そして、遂に音楽の先生に『ピアノが弾きたいです』と伝えます。先生は、『それはおもしろい！』と歓迎します。拍車がかかります。楽譜の写し、これは音符を覚えるのを助けてくれました。登校も午前五時すぎ、一番乗りです。ピアノを弾きたいが為。独り占めでした。とにかく好きだから弾いている毎日でした。『大公トリオ』『スプリング・ソナタ』『シンフォニー』など、学校にあるレコードを擦り切れるほど聴き漁るのも毎日でした。音楽好きな仲間が４、５人いたそうです。こうして、『大公トリオ』は暗記できるほどまでになります。

昭和２４年、女子高等学校の合併に伴いベーゼンドルファーが姿を現わします。このピアノを弾いた時の今も忘れられない感動とは、“俺はピアノの名人？！”と思わせたことでした。指も動くようになってきました。また、２６歳の山家先生（女）も着任され環境が整い始めます。時には、生殺しの蛇を鍵盤上に隠して先生をびっくりさせるような悪戯もしました。以来、音楽授業は教頭先生と剣道部の先生の監視付きになったそうです(笑)。小津安二郎映画のワンシーンを観る微笑ましさ、懐かしさを感じます。学外では山家先生のレッスンを受けに新津まで通っていました。実は、奥様も山家先生の生徒だったことはずっと後になって知ることになります。演劇部公演“悪魔の酒／トルストイ”で効果音も担当なさったとか。佐藤さんの実力が徐々に校内に知られていきます。更に、佐藤さんを有名たらしめるキッカケが山家先生からもたらされます。新潟日報主催のコンクール出場を勧められたのです。曲は、『幻想即興曲／ショパン』。そして、３位になったのです。新聞発表や校内での発表を通して“松高に佐藤峰雄あり”を印象付けたのです。

昭和２５年、新潟大学教育学部芸能学科・音楽科へ進みます。雪深い高田、高田師団司令部の跡地でした。他に、書道、彫刻、絵画がありました。“解放された時代だった”と仰います。皆素直で、他学科の学生との信頼関係がしっかりできていました。そんな人間関係を背景に明けても暮れてもピアノが弾ける毎日でした。当時は社交ダンスが流行ってきた頃で、多くの学生は夢中でした。でも、佐藤さんはピアノです。もう一人の友人と結託して、積極的に学生を社交ダンスへ送りだした後に質の良いピアノを弾く、そんな時間が一番欲しかったと。“好きこそものの上手なれ”なんと素晴らしいことでしょう。施錠した教授室の“スタインウェイ”を弾きたいがためにこっそり忍び込んだこともあるとか。運悪く声楽の先生に見つかるも見逃して頂けたそうです。当時の学園の寛大さ、生徒の育て方を知る和やかなエピソードではな

いでしょうか。細野稔人（彫刻家）、内山格（画家）さんらと交流しながら存分にピアノを堪能できた４年間でした。昭和２９年、大学卒業。叔母さまに勧められ村松に戻ります。宝町のご実家は、ご両親ともに亡くなり門が閉ざされ誰も住んでいない状態だったのです。五泉中学校の教員となります。坂道の１里の五泉新道の自転車通勤が２年続くことになります。教員だけでなくボランティアで音楽指導も精力的にこなします。月水金の夜は村松合唱団、火木土の夜は五泉いづみ合唱団の指導でした。楽しかったのですが、五泉から村松へ戻る時は疲れたと仰います。１里の上り阪です。ましてや、白山からの向かい風を受けたらもう降参、自転車を降りて曳いたそうです。ピアノが弾けない状態でしたが、１年２組クラス担任として、運動会で優勝した楽しい思い出もあります。五泉中の３年目を校長先生に約束した直後、巻高校へ異動することになります。当時は校長先生がスカウト役をこなし自分の学校への移動を勧めるやり方でした。その巻高校で５年を過ごします。ご結婚は巻時代です。奥様は津南高校の先生でした。大学の後輩です。しかし、新津の山家先生の生徒だということはここで知ることになります。運命を感じます。当時新津に住んでいたので３回の交渉を経て非常勤講師として奥様が勤務している新津高校への異動が叶います。１年後、新潟大学から“鍵盤楽器担当”の職を打診されます。五中、巻高、新津高に勤務した８年間はピアノを弾ける環境ではなく不安はありましたが、また大好きなピアノが思う存分弾ける環境は何にも代えがたいものでした。

昨年の９月下旬、新潟市内野のお宅を訪問しました。奥様は外出中、現役のピアノの先生でこの日もレッスンとのこと。中二階のお部屋でお話を伺うことに。ピアノが２台、本棚には楽譜がぎっしり並んでいました。お話が始まると直ぐに私の良く知る先輩、“杵渕政海”さん、“吉原士朗”さんのお名前があがり、以降とてもアットホームな気分でお話を聞けたことは幸いでした。
８１歳とは思えない純真でエネルギッシュなお姿、語り口がとても印象に残っています。

『好きこそものの上手なれ』

いつまでもお元気で、高校生の当時を思い出して復活“ベーゼンドルファー”を弾いてください。その音色を聴ける日を私たちは首を長くして待っています。

ありがとうございました。

佐藤峰雄先生宅（新潟市内）のピアノレッスン室にて

「ベーゼンドルファー」のピアノ復元基金のお願い（取り組み中）

母校松高には、登録有形文化財の正門以外にもお宝があります。世界の名器と言われるオーストリアのベーゼンドルファー社製のグランドピアノです。１９２９（昭和４）年に購入され、以来８４年経った今も母校の音楽の授業で時折使われています。

当時、村松高等女学校の菅家コウ教諭の熱意に打たれ、村松町が３,８００円（当時、家が２～３軒建てられた値段）で購入してくれたものだそうです。その後、１９４６（昭和２１）年の村松大火の際、校舎が猛火に襲われる中、先生方が必死にピアノを運び出して難を逃れ、奇跡的に生き延びてくれた不死鳥のピアノです。このピアノの製作は全ての工程を手作業で行うため、１年以上の月日を要し、生産台数もそう多くはなく、貴重な名器、お宝です。平成２５年６月１日（土）の第５６回定期大会において、この名器「ベーゼンドルファー」のピアノを復元しようと、復元基金を募ることを決議し、その受付を開始しました。それに呼応して、８月１８日（日）の同窓会本部の総会において、本部としても取り組むことを決議し、諸準備を整えた１０月、同窓会会長４名連名（本部の荒木快英、東京同窓会の金子鶴男、五泉会の日高太郎、札幌松城会の今井順爾）による復元基金のお願いが、全国の同窓生に対してご案内されました。

寄付の問い合わせは、事務局または幹事までご連絡願います。

絵葉書：新潟縣村松高等女学校音楽教室（発行年月不明）
（木村寿一氏提供）

幕末の村松藩士　中村庫蔵の写真術

木村　寿一（高１４）

はじめに

かつて、松城会の集まりに出席した際、故・中村勤大先輩（旧中２０回）から、同氏の祖父で村松藩士の中村庫蔵（なかむらくらぞう）が残しておいたという幕末の日記の中から、「写真に関する記録」の資料をいただいていたことがある。その時には特に気に留めなかったが、最近、その資料を改めて取り出してみると、幕末、写真器を購入し、写真術を身につけた者として、中村庫蔵は、少なくとも村松で最初に写真器を購入し、それで写真を撮った人物と思われますのでご紹介します。

村松藩士　中村庫蔵の日記によると

故・中村勤氏が読み解いた祖父の残した日記によれば、中村庫蔵は、村松藩の鉄砲火薬御用係として、文久２年（１８６２年）近代砲術の研鑽及び武器弾薬の調達を拝命、江戸へ出向し滞在中、業務上接触した横浜の内外商人達から数多の珍しい輸入品を見せられ、その中で特に「写真術」に興味を覚え購入を決意した。

苦しい金策の結果、写真器（１８３９年製造のダグレオ型カメラ、或いは模造品？）及び撮影、現像、定着の複雑な工程、操作と、薬品製法をも解説したマニュアルと付属器具や原板や用紙類を購入した。時に元治元年（１８６４年）、これは日本写真史の元祖「下岡連杖」が初めて我が国に写真館を開設した僅か２年後のことでした。

代価は幾許であったか？買い求めた薬品類の納品書が残されているが、肝心の本体に就いては不明、推定では２５両位か（藩勘定役の夏目様から都合１５両を無理に借用したとの記録があるので）。

垂涎の宝物を入手して早速、珍奇なる写真術を懸命に習得し、同年７月８日の日記には『藩邸に於いて藩主・直賀公を始め御次廻り数人を写した』とある（これらの作品の現存は認められない）。

幸いにも貴重な１枚の「写真原板ガラス」が新発田市の野口政昭氏家に保管されていました。

この肖像は、野口様のご先祖御側用人野口彦兵衛様の晴れ姿で、慶応２年（１８６６年）、中村庫蔵が帰藩の際に携行したカメラで撮影したものと推定されます。

御側用人 野口彦兵衛様

余　話　村松高校の大先輩　雲村俊慥様（高５回）の刊行本『討入り四十九士』によれば、吉良邸に討入りの際、赤穂浪士の助太刀をした村松藩士の剣豪２人の内の１人「野口正国」は、上記写真の野口彦兵衛の先祖と思われます。村松藩は、堀部安兵衛をはじめ新発田藩との人的つながりが強かったようです。

これを機に、木村写真業３代・１００年を整理したい。

平成２４年度　収支決算報告書

（平成２４年４月１日から平成２５年３月３１日まで）　　単位：円

収入		支出	
会費	1,179,000	第５５回大会費用	850,200
（年会費　579,000）		会議室借用費（幹事会、各委員会の開催）	92,540
（大会費　600,000）		会報関連費（年２回発行）	316,540
寄付金	31,000	通信費（宅配便、はがき、切手代等）	27,560
本部助成金	50,000	渉外費（本部同窓会出席、県人会賛助会費等）	141,000
雑収入	1,365	諸雑費	43,889
収入合計	1,261,365	支出合計	1,471,729
収支差金	−210,364		
平成２３年度からの繰越金	343,199		
平成２５年度への繰越金	132,835		

平成２４年度　寄付者及び寄付金額　　誠に有難うございました。

五泉市長	10,000 円	加藤久子会員	7,000 円
高１９回生同期会有志	7,000 円	笠原静夫会員	3,000 円
神田正子会員	1,000 円	安中信夫会員	3,000 円

若弥人形と共に

鈴木若弥さん（高１７）を訪ねて

塚野　ミイ子（　高１９）

かねてより「ひょっこりひょうたん島」の「ひとみ座」で人形を作っていた同窓生の方が、独立し藤沢の郊外で人形作家としてご活躍と聞き、是非お会いしたいと願っていましたが、９月某日、漸くお訪ねする機会を得ました。高台にあるご自宅の紅殻色に塗られた壁に沿って踏石を辿ると意匠を凝らしたアトリエに通じます。扉を開けると土間の一隅に据えられた轆轤の周りに作業を待つ素焼きの童が迎えてくれました。そして飾り棚に居並ぶ人形とどこか似ている若弥さんに出会えました。

陶人形作家鈴木（旧姓瀧澤）若弥さんは幼い頃から絵を描くのが大好きで、村松高校では３年間美術部に在籍し、富永先生のご指導を受け美術学校の油絵科入学、卒業後人形劇団「ひとみ座」に研修生として入団、以後４年間人形制作や公演と楽しい青春時代を過ごしました。わけてもNHKの「ひょっこりひょうたん島」の番組に参加できたことは忘れがたい思い出とエピソードを交えて話してくださいました。

制作した陶人形に囲まれて

当時はまだ録画したものを繋ぐことが難しく、また時間が掛かるため、NGを出すともう一度最初から撮り直していたこと、後半川内の御母さまが若弥さんの名前が人形役者としてテレビに流れるのを楽しみにしておられたと友人（母上の）から聞いてそれが唯一の親孝行だったかなと思うと心が温かくなるとのことでした。

退団後はフリーでアクリル樹脂や布等で人形を作っていましたが陶芸作家の方と出会い、土で人形を作るようになりました。信楽の粗めの土で成形し、土の味を生かすため釉薬はかけず焼き締める。焼き上げた人形に透明水彩又はアクリル絵具で着色する今のような形ができるまで試行、また試行。

若弥さんが４０歳の時に美術作家で良き理解者でもあったご主人が突然帰らぬ人に。２人の御子息と義母との生活もあって北海道から西表島まで多くの個展を開催し、精力的に人形作りをしたと言います。

人形作家として軌道に乗って来た頃に、彫刻家を志していたご長男が２年間の闘病の末がんで他界されます。

「その頃から旅をするようになりました。旅は遊びが半分、人形作りの糧が半分でしょうか。地方での個展も旅です。大好きな本を持ってね。その国々のその土地土地の色使い・文様・形に触れ、日常を離れてその風景の中に身を置くと、ああこんなものを作ってみたいとイマジネーションが膨らむのです。アジアの国々が好きですね。雑然としているのに、やわらかな感じがするのが良いのかもしれません。」

アトリエは旅で収集した異国の土鈴が数多く壁面を飾り、趣味で制作した土器の形の花瓶や、抑制された彩色の狛犬が並び、遠い昔どこかで出会ったものが少し形を変えてそこにある懐かしく心地よい空間です。

６０代の現在、ご次男の家族と共に暮らす日々。幼い２人の孫娘さんと庭の花を育て、山桃や野いちごを摘む時間も幸せなひととき。夏は早朝５時に起床、近くの友人３人と一反の畑で野菜づくり。

「畑で土と交わる時、粘土を捏ねて人形を作る時、故郷が村松の川内であったということが私に影響を与え続けていたのだと思い知ります。それなのに村松弁を忘れスムーズに言葉が出てこなくなったのが寂しい。」と笑って話してくださいました。

若弥人形のやさしさともの想う佇まいは鈴木若弥さんご自身と重なりました。　是非一度展覧会にお出かけください。

平成２６（２０１４）年

鈴木若弥さんの個展開催のご案内

＊２月２７日（木）～３月４日（火）12:00～18:00
　ギャラリーK（第一ホテル吉祥寺内１階）
　〒180－0004　武蔵野市吉祥寺本町2－4－14
　TEL　0422（21）2350

＊５月１０日（土）～５月１８日（日）
　石井画廊
　〒３２６－０８１４　足利市通２丁目１２－１５
　TEL　0284（43）2346

＊１１月～１２月
　そば処　「阿弥陀瀬」ミニギャラリー　蔵
　〒９５９－１７１７　五泉市阿弥陀瀬３９９－５
　TEL　0250（58）7823

（お問合わせ）鈴木（旧姓瀧澤）若弥
　〒252－0813　神奈川県藤沢市亀井野572－5
　TEL：0466（81）9766

私が元気で来られたのは！？

片柳　ムツ（高８回）

「何時もお元気ですね！　片柳さんは私の目標です！」等と良く言われる。何時も大声で話たり笑っているせいか？　遊びのグループでテニス・ゴルフでは最年長という事もあるのでしょう。とにかく悪い気はしないし、有難うと言っている。特別な事をした訳ではなく、食事・運動・睡眠・くよくよしない等を心掛けた程度だ。

小学校低学年の頃、母方の祖父の身体がとても悪く、６０歳ほどで亡くなった事が私を看護の道に進ませた。看護を学んだ事は、私の生き方に大きく役立つと共に、半世紀余りを無事に過ごせた要因だと思っている。

２６歳で結婚式を挙げた時、相方の親戚、特に母方の皆様は１００キロ近く有りそうな肥満者だった。しかし好きな相方には美味しい物を食べさせたくて、その上、朝食は確りと食べる主義の人だったので、料理本片手に朝早くから頑張った。仕事上、外食も多く帰宅も遅い不規則な生活で、気が付いた時には努力の甲斐も無く肥満体になっていた。それからは、減塩・カロリー減・脂肪減と必死に取り組んだが、相方は戦中戦後の悪化した食糧事情の記憶により蓄積回路が発達していて、減量には全く不向きであった。相方や親戚の姿を見て、育ち盛りの子供たちが減量してしまい、発育に障害が出ないかと思い悩んだ。結果的には皆が元気で過ごして来たので、私の単なる取り越し苦労であった。

子育てをしながら仕事も続けていた時は今のように通勤事情には恵まれず春日部から飯田橋までは、朝は早く出て夜は星を見上げて帰宅していた。４０歳半ばに少し疲れを感じる様になったので休職を考え、４６歳で早期に退職した。でも体力維持に何かしようと思った時、自治体には色んな企画があり参加者を募集しているのを知った。手始めに軟式テニスを申しこんで見たものの田舎なので、それなりの電車の路線は有っても遊びの移動は自動車が一番便利という事が分かった。そこで、遊びと平行して車の免許に挑戦したらスムーズに取得出来たので、車を買う事にした。

家庭生活にも時間の余裕が出来、テニスに夢中なった。しばらくして硬式テニスに変えてから一層頑張ってしまい、肘・膝・腰を痛めてしまった。車生活に甘え、歩かなくなった事も一因だったのだろうが、医師には「年を考えなさい」と言われ、少し落ち込んだ。それからは、スポーツ仲間と日帰りの旅をしたり、ストレッチ教室に通ったりして、現在も週一のペースで続けている。

テニスを始めて１０年程した頃、娘が結婚することになったが、結婚祝賀会をゴルフコンペにしたいと言いだした。私はテニスと同時にゴルフの講習も受けていたが、３ヶ月後のその日までは猛練習の日々を重ねた。当日はラウンドするのが精一杯で、楽しむ余裕など少しも無かった。でも沢山のゴルフ仲間が出来、コースに出るのが楽しくなると欲が出て、この難しいスポーツに挑戦したくなった。今も初心を忘れず挑戦し喜んだり・落ち込んだりしながら楽しんでいる。

元気印の私に災難が振りかかって来たのは、古稀を迎えて直ぐ原因不明の肺炎に罹り、病院通いを余儀なくされた。癌で無かったのは幸いだったが、アレルギーと言う事でステロイド治療が始まった。辛かったのは症状では無く、治療の長さだった。半年近くスポーツは禁止になったが、４ヶ月位して我慢できずにゴルフを始めたら、意外にも少しずつ元気を回復することが出来た。

年々、加齢の所為か又は、自覚が無いままに体力が衰えているのか、２年毎に発病を繰り返すようになった。ゴルフ・テニスは健康のバロメーターなので、続ける為にも体力維持に努力している。２年程前からは、体幹を鍛え正しい体の動かし方を学べるピラテスを知り、その効果で体調は良く、この出会いを有り難く思っている。

世の中では睡眠に何らかの形で悩みを持っている人は多いと思う。私も例にもれず相方の鼾で長年悩まされ、後には睡眠時無呼吸症候も加わり睡眠障害を起していた。私は夜、相方に何かアクシデントが有ったらと気になり、呼吸が止まった時は様子を見て、時には体を揺すって呼吸を促したりしていた。

２年程前、相方の循環器の先生に相談したら、タイミング良く持続的自動気道陽圧ユニット（ＣＰＡＰ）と言うものが出来、心筋梗塞や狭心症等との関係をデーターに採っている先生がいるので参加するか、と言われて直ぐに決めた。気道が狭くなり無呼吸になった時、自動的に圧力をコントロールし呼吸を正常に戻してくれるのだ。

仰々しい装置だが、効果覿面！　我が家に静かな夜が訪れ、本人は今、夜中に起きる事も無く朝まで熟睡している。月に一度、器械に残っているデーターを提出しなければならない。近い将来、装置がなくても正常な呼吸が期待出来るそうである。今、この装置はリースだが、いずれ適応症の誰でもが、簡単に利用出来る様になればと願っている。

第１５回　小出博三氏油絵展

‘１３/３月３日～９日の１週間、今回で最後となる氏の油絵展が、有楽町の東京交通会館（シルバーサロンA）にて開催された。　小出氏（向かって左端）と記念写真

東日本大震災から２年が過ぎ、その実態を、仙台より発信

阿部　勇（高９回）

激震と大津波、放射能汚染が東北を襲った東日本大震災から、この３月１１日で２年が経過した。

３月８日現在、警察庁の纏めで被災の大きかった福島、宮城、岩手の東北三県で死者１５，８１４人、行方不明者２，６６４人と、犠牲者は１８，４７８人である（表参照）。　それに加え、福島第一原発事故による避難者を含めて、今もなお約３１５，０００人が仮設住宅などで生活を強いられている。その上原発事故の避難者は自宅に帰る目途が立っていない。さらに、復興庁によると避難生活による体調悪化や自殺などで亡くなった関連死は、三県合わせ２，２５６人を数える。

河北新報記事から
２５．３．８日現在

死者数（行方不明者数）
宮城　9,535 人（1,302 人）
岩手　4,673 人（1,151 人）
福島　1,606 人（211 人）
（10 日現在・各県警などまとめ）
……
全国 15,881 人（2,668 人）
（8 日現在・警察庁まとめ）

この避難者の滞在先は全国４７都道府県に及び、被災三県から県外への被災者は６６，０００人を超える。この方々の暮らしの基を築く集団移転となる計画中の住宅の再建は、被災三県２３市町村で今秋以降となる。

公営住宅の計画は被災三県で２４，０００戸であるが、完成はまだ１００戸に満たない状態であり、被災者支援は始まったばかりである。　（平成２５年４月記）

●主な地震被害の比較（河北新聞から）
（予想される南海トラフ、首都直下含む）

	首都直下地震	南海トラフ巨大地震	東日本大震災	阪神大震災
	東京都 2012年4月想定	中央防災会議 12年8月想定	11年 3月11日	1995年 1月17日
震源	東京湾北部	東海沖から四国沖	三陸沖	淡路島北部
規模	M7.3	M9.0	M9.0	M7.3
死者・行方不明者	9700人	32万3000人	1万8600人	6400人
建物全壊被害	30万4000棟	238万6000棟	13万棟	10万5000棟
経済的被害	112兆円※1	81兆円※2	17兆円	10兆円

※1：05年の中央防災会議想定
※2：東海、東南海、南海の3連動地震による03年の中央防災会議想定

●主な地震での地震保険金支払額（河北新聞から）

発生年月	地震名（マグニチュード［M］）	支払保険金額（億円）
1995年1月	阪神大震災［7.3］	783
2001年3月	芸予地震［6.7］	169
03年9月	十勝沖地震［8.0］	60
04年10月	新潟県中越地震［6.8］	149
05年3月	福岡県西方沖地震［7.0］	169
4月	福岡県西方沖地震［5.8］	64
07年7月	新潟県中越沖地震［6.8］	82
08年6月	岩手・宮城内陸地震［7.2］	55
7月	岩手北部地震［6.8］	39
09年8月	駿河湾を震源とする地震［6.5］	50
11年3月	東日本大震災［9.0］	1兆2346

※日本損害保険協会、日本地震再保険調べ

松高ミニ同窓会

高岡　光夫（高１５）

ふるさとの白山が、母親の笑顔に見えた３月１７日、田上温泉で昭和３４年３月に十全中学校を卒業した私達の古希同級会が開かれ出席してきた。

当日、恩師小林（旧姓本宮）フミ子先生も含め２９名が出席した。その中には、中学卒業後村松高校に進学した阿部弥一君、高岡久義君、岡野（旧姓中山）斉子さん、岡本（旧姓中山）勝子さん、新保静代さん、滝沢（旧姓高岡）イツ子さん、五十嵐（旧姓安中）ヒデさんの姿もあった。２クラス７２名の卒業生のうち１４名が故人となり、会に先立ち黙祷をして故人を偲んだ。

会で乾杯が終わるとそれぞれの近況を語り合い、特に高校時代の話しになるとミニ同窓会に出席している感じがした。中学、高校の頃の７０歳代のイメージと実際に７０歳になった感じとの差があり過ぎるせいか、古希というイメージと程遠い同級会となった。

古希同級会（平成25年3月、田上温泉）

ところで、日本人の平均寿命が男性７９歳、女性が８６歳となり、６５歳を迎えたいわゆる高齢者となった者は、男性が２０年、女性が２５年の老後生活が続くと言われている。高齢者自身の課題として

１．自立期間（健康寿命）の延長
２．住み慣れたところでの日常生活の維持
３．人とのつながりづくり

が大切と聞く。私も高齢化世代の５年生となり、生き方自体が問われる年代となった。

高齢化社会の負担という問題からみると、暗い話になりがちであるが、増えた自由時間を有効に過ごすことを思えば、高齢化社会も明るいものになるような気がする。特に、人のつながりづくり、という事から考えると同級会や同窓会は、損得抜きで付き合える人とのつながりである。

今回の同級会出席で感じたことは、先ずは健康であること。次に、家族が笑顔で送り出してくれたこと。そして、２８名と旧交を温められた嬉しい楽しい一泊二日の旅であった。

健康ウオーキング（散策会）に参加して

亀山　知明（高３）

好天気に恵まれた今年の春のゴールデンウィークも過ぎた週末の５月１１日（土）、同窓会会報で案内もあり、東京の近郊にある「自然美の宝庫」と言われ、フランスのミシュラン社の「旅行ガイド」でも三つ星のついた「高尾山」、その麓にあるＪＲ高尾駅に一行７名が集合した。

社寺風デザインの駅舎、高尾駅正面には武蔵陵墓地の最寄り駅に相応しく、楷書風の書体で「高尾駅」と墨黒々と書かれた看板が掛っていた。

JR高尾駅北口に集合した一行

朝の気象予報どおり、雲が厚く今にも雨が……と思われる日となったが、出発予定の１０時半ともなったので、目的地に向かってスタートした。

駅前の道は、新宿追分から八王子市内を東西に通り抜け、高尾山麓に続く甲州街道、西八王子あたりからは両側が８００本余と言われているイチョウ並木になっており、浅緑色に彩られた歩道を歩く私達の心を和らげてくれた。道筋の「町名」には、古くは室町、戦国時代を通して戦略的要所となった城下町、また、江戸時代には西への守りの要所「小仏関」、明治時代に入ってからは日本の産業振興の基礎となった「シルク」の集散地、開港地横浜のシルクロードの起点ともなったということからか、歴史的な名残りがうかがえる町名が多くあった。

知らない場所を歩くと、新しい何かに出会え、その土地に魅力を感じ、いろいろなことが目に焼きつく。

周りの新緑が目に美しい高尾山一帯の森林は、１千数百種の植物が自生し、５千数百種の昆虫が生息している自然の宝庫、絶滅の恐れがある動植物のリストで「レッドリスト」にある危急種に指定されている「オオタカ」が生息していて、最近環境が回復し、指定解除が検討されているとか言われている。地域の多くの人達の努力が感じられ、私達一行をすがすがしい気持ちにしてくれた。

歩くこと３０分余り、山から流れ出た「浅川」にかかる「参宮橋」を渡り、陵墓への参道に入る。

４００m余と言われている長い砂利道の参道は掃き清められており、例年の天皇参拝時には、レッドカーペットが敷かれるとか。

道の両側は奥深く鬱蒼と樹木が覆い、京都の北山杉が数百本をはじめ、一本一本が丁寧に手入れされている。低い木などは、盆栽のように形作られており、管理にも心遣いがされていて、いいものは数mもあるような木に感じられた。これも日本の伝統文化の一つか。

その広さも、全国にある多くの陵墓の中でも、仁徳天皇陵と共に、１、２位の広さ、規模とか。静寂が支配する空間と共に、「癒しの小宇宙」を演じ、身も心も引き締まり心が洗われた。

その先の荘厳な陵、大正天皇・皇后、昭和天皇・皇后の４陵を参拝した。中でも、久し振りに参拝した「武蔵野陵」（昭和天皇陵）では、日本人の多くがアイディンティティとしている「天皇」を、昭和に生まれ育ち、今日まで生きてきた私の心に、改めて深く刻み込んだ。そして、ここに日本人として受け継がれていくものがあるという安心を肌で実感した。

武蔵野陵（昭和天皇陵）前にて

周囲の深い山々の若葉に囲まれたこのパワースポットを散策し、身も心もリフレッシュし、来た道の裏道を高尾駅に向かって折り返した。そして新たなエネルギー源の注入・補給と明日からの活動の源泉を求めて、幹事さんご推薦の高尾山山麓にある天然温泉で身体を清め、くつろぐべく「高尾の湯・ふろッぴィ」に靴を脱いだ。

ゆっくりと温泉に浸かった後に集まった部屋は、マイペースの気楽な場となり、早速お酒文化にどっぷりと浸ることとなった。用意されたビール、焼酎、日本酒などで練習を含めて３回の乾杯を重ね、一緒に歩いた同窓の人達との距離はぐっと縮まった。鹿児島産の焼酎か？芋の豊かな香りがふわっと広がるお湯割り。しかし、主役は楽しい話と笑顔。とかく激動してきた昭和の時代へのタイムスリップした話しが多くなる年令。さすが、越後から何かを求めて東京に住みついたメンバー、「あれから××年」である今日、いたずらに懐古話に耽ることなく、ストレスをためず「らしく生きる」、食べたいだけ食べ、お酒はあくまでコミュニケーションのツールとして雰囲気を楽しみ、それをエネルギー源にする、腹が少し出てきたけど、「人」に会わないと色々な文化の素晴らしさが味わえない、それには自分から会いに行く、多くは懐古よりも回顧の話題、すばらしい仲間と過ごした。まだ眠っている何かを、新たな出会いを期待していきたい。

最後に残ったのは、新緑の間から吹き抜けた風の香りと心地よい足腰の疲労感であった。そして、最大のトキメキはお酒だった。ただし、深酒はしないと自分を戒めた。皆と共々「今日よりも、よい明日」を目指そうと思った１日であった。幹事さんに感謝！！

第１９回親睦ゴルフ大会報告

平成２５年４月１０日（水）恒例にしている松高東京同窓会の第１９回親睦ゴルフコンペが、埼玉県の入間カントリー倶楽部に於いて開催された。好天にも恵まれて１０名の参加者も存分にプレーを楽しんだ。

成績（敬称略）

優勝・漆原 茂、準優勝・片柳ムツ、３位・鈴木理恵子

参加者名（敬称略）

１組　亀山知明、鈴木輝雄、鈴木理恵子

２組　金子鶴男、片柳ムツ、吉井　清

３組　大橋貞夫、今井英雄、石黒勝夫、漆原　茂

スタート前の緊張

第２０回親睦ゴルフ大会報告

平成２５年１１月２０日（水）事情で定例より１ヶ月程遅れて、東京同窓会の記念すべき２０回目の親睦ゴルフコンペが、秋晴れの下、入間カントリー倶楽部に於いて開催された。漆原さんが連続優勝を飾り、斉藤豊さんの初参加など話題の多い大会であった。

成績（敬称略）

優勝・漆原　茂、準優勝・亀山知明、３位・吉井　清

参加者名（敬称略）

１組　亀山知明、鈴木輝雄、鈴木理恵子

２組　片柳ムツ、大橋貞夫、吉井　清

３組　石黒勝夫、漆原　茂、斉藤　豊

清々しい秋空の下、スタート前にパチリ！

ご参加お待ちしています

第２１回 親睦ゴルフ開催のお知らせ

平成２６年４月９日（水）入間カントリー倶楽部に於いて第２１回親睦ゴルフ大会を催します。参加をご希望の方は下記までご連絡ください。

吉井　清（高８回）TEL&FAX:042-527-6482

亀山知明（高３回）TEL:042-572-5096

◆ 第２回健康ウオーキング（皇居内見学）

今回は、めったに入ることの出来ない皇居内の見学をガイド付で行います。１か月前に宮内庁への予約が必要なため、「参観人数を１０人」とします。

先着順で受け付けますので、お早めにお申し込みくださいますようお待ちしております。

１．日時　５月１５日（木）（予定）
　　午後１時３０分～
２．集合　「皇居桔梗門前」
　　午後１時（厳守）
３．身分証持参、服装任意
　　写真OK
４．見学日時は１か月前に
　　決定。決まり次第、各人にご案内します。

（申込先）石黒勝夫（03－3330－4564）
　　森田勝美（03－5681－0793）

「同趣同好の集い」のご案内

～楽しいひと時をご一緒しませんか～

● 松高東京同窓会親睦ゴルフ大会

時　期　年2回（4月、１０月 頃）

場　所　入間カントリー倶楽部

問合せ　吉井　清（高８回）

Tel：042－527－6482

亀山知明（高３回）

Tel：042－572－5096

● 健康ウオーキング（散策会）

時　期　年1回（５月頃）

行き先　その都度事前に決定

問合せ　石黒勝夫（高１４回）

Tel：03－3330－4564

森田勝美（高１６回）

Tel：03－5681－0793

訃　報

佐久間英輔氏（高6）が、２０１３（平成２５）年1月２９日、ご逝去されました。
佐久間氏は、東京同窓会の幹事を長く務め、同窓会の発展にご尽力されました。
ここに、生前のご功績に感謝申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。　合掌

募集中！　皆様からの原稿・情報をお待ちしています。

会員の皆様が日頃考えていること、取り組んでいること、同級会や地域で活動していることなど、お気軽に原稿・情報をお寄せ下さい。心よりお待ちしています。

【　ご提供に当たっての留意事項　】

1．文 字 数：　８００～２，０００字程度（出来れば写真も添えて）
2．締 切 り：　平成２６年９月３０日（火）（必着）
3．連 絡 先：　広報委員会　石黒勝夫まで
〒166―0001 東京都杉並区阿佐谷北６－32－19　TEL＆FAX　(03) 3330―4564
E - mail : isgrkto-214@mail.goo.ne.jp

ご紹介

『討入り　四十九士』

赤穂浪士を助けた村松藩二人の剣豪

（雲村俊慥　著（高５）　イースト・プレス　発行）

村松出身で村松高校東京同窓会会員の雲村俊慥さん（高５）が長年、村松藩の史料に記録された真相を追い続け、その謎に迫った史伝小説を出版されました。「村松藩の剣豪だった野口正国と鳥羽逸平の二人が、赤穂浪士が吉良邸討入りの際、助太刀をした」というもの。

初めて明かされる
忠臣蔵の真実！！
是非、ご一読を！

ご購入方法　**【特価　1,500円**（送料込）**】**
次のところにご連絡ください。専用の振替払込用紙（赤）（振込手数料無料）が送られてきます。
〒101 - 0051　東京都千代田区神田神保町 2 - 4 - 7
久月神田ビル６Ｆ
Tel　03 - 5213 - 4695　Fax　03 - 5213 - 4692
㈱イースト・プレス　渡辺あや　あて

編集後記

昨年五月に村松高校東京同窓会のホームページを開設しました。会報誌の発行が資金不足もあって年一回となり、当会の情報発信や会員同士のコミュニケーションを補う意味合いもあっての事です。タイムリーな情報はホームページでご紹介し、ニュース性の薄いものは会報誌に掲載するなどして、今後とも会員の皆様との情報交流を充実して参りたいと考えています。これからも、会員の皆様方によるご協力とご支援をお願いいたします。

昨年六月、東京同窓会は母校にある古い「ベーゼンドルファーのピアノ」修理の募金活動に立ち上がりました。皆様や関係者の方々のお陰と本部同窓会のご努力もあって、当初の目的は果たしつつあるようです。いつか修理が成って再生したピアノ演奏会が開催され、全国から集まった同窓生や関係者と共に「ベーゼンドルファー」の「ウインナ・トーン」を夢心地で拝聴できたら、これに優る悦びはありません。

東京同窓会が将来とも発展し、元気に活動を継続していくためにも皆様方のご支援を心底よりお願い申し上げます。

大橋　記

平成２６年３月　第５５号　　表紙の題名・題字は佐伯益一氏（旧中２７回）の書

発行人　新潟県立村松高等学校東京同窓会　広報委員会

新潟県立村松高等学校　東京同窓会事務局
〒190―0011　東京都立川市高松町２－37－18
Tel・Fax　042―527―6482（吉井　清）
東京同窓会ＨＰアドレス：http://tokyo.karamatu.com/index.html